
麻帆良に歌舞く鬼

カツマ・タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に歌舞く鬼

【Nコード】

N9787W

【作者名】

カツマ・タカ

【あらすじ】

かつて魔化魍と手を組み鬼と人間の大人を滅ぼそうとした鬼がいた。

しかし、友人であった鬼に止められ、その姿を消してしまった。それから時が流れ、その鬼の力を受け継いだ青年は魔法使いの存在を知り巻き込まれていく。

プロローグ（前書き）

今回初のライダークロス小説です。

気に入らなければバックしていただください。

プロローグ

昔々、ある小さな村に、一人の心優しい鬼がいました。

その鬼は子供達とその笑顔が大好きで子供達と一緒に遊んで暮らしていました。

だけど、大人はそんな鬼を快く思っ居らず、鬼を村から追い出していました。

鬼は大人を憎み、いつか復讐しようと考え、心優しい鬼は悪い鬼になってしまいました。

それと同時に人間に味方する鬼も一緒に始末しようと考えていました。

だけど、同じ鬼でもあり親友である鬼に行く手を阻まれ、姿を消しました。

その心優しかった鬼のその後を見たのは誰もいませんでした。

それから時が流れ……

ここは『麻帆良学園都市』。表向きには巨大な学園都市として名高いが、裏では影から人々を護る魔法使いと呼ばれる者達がいる。しかし、此処には魔法使い以外の者達も存在している。

「ヒュウウゥ。こんな所に魔化魍が居るってのにビックリ……って魔化魍じゃなくて式神かよ。面倒くせえなあ」

そういった青年は帰宅途中に森の中で式神達による襲撃を受けていた。その近くには、式神を召喚した和装の老人達が此方を見ながらにやけていた。

「ま、なんであれ、専門外であるが、放っておく訳にもいかないか」

青年はそう言いながらポケットから理科の実験などに使う音叉によく似た物を取り出し、其れを自分の腕に当てると、キーンと鳴り、其れを額に翳すと鬼のような文様が浮かび上がる。

「変身」

言葉と共に青年の周りに風と桜の花びらが舞い青年を包み込む。風が収まると青年の姿は緑と赤の非対称の角を持った鬼『歌舞鬼』へと変化した。その手には「音撃棒・烈翠」と「鳴刀・音叉剣」が握られていた。

「さあ、パーティとしゃれ込むとしようか！」

その言葉と同時に歌舞鬼は式神達へと走り出していった。

これは麻帆良で生活していた『歌舞鬼』を受け継いだ青年と魔法使い達による在る一つの物語である。

プロローグ（後書き）

とまあ、こんな感じではじまりました。

感想等などお待ちしております。

麻帆良に歌舞く鬼 人物設定1（10月11日更新）（前書き）

今回はカブキ君の設定となっております。

尚、この設定は随時更新する場合があります。

あと、後書きにて募集を行います。

麻帆良に歌舞く鬼 人物設定1（10月11日更新）

登場人物設定

歌舞鬼^{カフキ}

年齢…17歳 麻帆良学園男子高等部二年生

性格はノリが軽く巫山戯ているように見えるが義理人情に溢れている。子供好きでもありよく保育園などに行っては遊び相手をしている。また、女の子も好きで休日になるとナンパに繰り出すが、無理強いなどせず断られたら深追いしない為、女子からも本気で嫌われては居ない。

『清めの音』を駆使して魔化魍から人々を護るため人知れず戦っている戦鬼、仮面ライダー歌舞鬼として行動している。幼少の頃、とある事情で鬼に出会い、それが切っ掛けで鬼になる事を決意。厳しい修行の末、鬼になり、戦国時代の戦鬼、歌舞鬼の名を襲名した。その後も独自の修行により、『打』だけではなく『管』と『弦』の武器も扱えるようになる。

枝垂桜

歌舞鬼が所有するバイク。響鬼の不知火と同じバイクであるが、タンクなどに枝垂桜のペイントを施している。とある人物からからブレゼントされた。

音撃武器

変身音叉・音角 鳴刀・音叉剣

音撃棒・烈翠 音撃鼓・花吹雪

音撃管・????? 音撃鳴・?????
音撃弦・????? 音撃震・?????

音撃技

音撃打・業火絢爛

音撃射・?????

音撃斬・?????

ディスクアニマル 各種

音式神・消炭鴉

カブキのパートナーである音式神。カブキの命令しか聞かず、カブキ以外の人物が命令すれば突かれるか吹き飛ばされるかのどちらかである。

変更点

この物語は歌舞鬼以外の鬼は在る事情によりあまり登場しません。登場したとしても回想や名前などで出てくる事になります。勿論、響鬼も例外では在りません。

更にオリジナルの鬼も登場する場合があります。

時期はオロチ現象から数年後の物語でありオロチ現象を清めて以降、魔化魍の出現は滅多に現れる事はない。

また、魔法は一切効かない設定となっております。

麻帆良に歌舞く鬼 人物設定1（10月11日更新）（後書き）

以上がカブキ君の設定となります。

さて、前書きで書いたとおり募集を行います。

この作品のカブキ君は撥だけでなく菅と弦も扱えるようになっていきます。

そこで、カブキ君の音撃菅と音撃弦の名前募集を受け付けます。もちろん、音撃射と音撃斬の名前も募集します。

皆さんの募集を心待ちしております。

壱之巻 歌舞く鬼（前書き）

ようやく更新できた。

意外に文字にできない……。

それでもよろしければどうぞ。

壺之巻 歌舞く鬼

「あれ、迷ったかな？」

「え、嘘でしょ!？」

此処はある山の中。其処に女性二人の登山客が山を登っていた。

「遭難なんて洒落にならないからね」

「うーんおっかしいなあ。ちゃんと道なりに進んだ筈なんだけど……」

片方の女性は地図を見ながら確認する。其処にはちゃんとしたルートが書き込まれたが、現在二人の登山客がいる場所は明らかに正規のルートから外れていた。

その時だった。

「人間だ」

「人間だね」

登山客の前に現れたのは古めかしい格好をした男女二人。しかし、現れた男女二人は『普通』ではなかった。何故なら。

「我らの子の」

男の方の声が女であり。

「エサになってもらうぞ」

女の方の声が男の声であった。

「ヒッ!？」

「な、何!？」

突然の出来事に戸惑う二人だが、その直後二人は後ろに引っ張られていった。引っ張られる方向を見ると其処には先程まで無かった山小屋があり、小屋の中から赤い光と二本の糸が伸びており二人の両脚に巻き付いていた。

「キヤッ!？ な、何これ!？」

「嫌! 助けてー!！」

二人の叫びは虚しく響き、小屋に引きずり込まれていく。
後に残ったのは登山客の荷物だけであった。

S i d e カブキ

「『突如消えた登山客。その行方は!？』ねえ。こりゃあ、『ツチグモ』系の魔化魍だな」

とある休日の日。麻帆良学園のとある喫茶店で一人の青年が新聞の記事を読みながら呟いていた。

「まあ、タカちゃん達飛ばして探索中だし、後は結果待ちだな」

そう言ってコーヒーを飲む青年、カブキは再び新聞を読み出す。

「カブキ君、コーヒーのお代わり要る？」

「んじゃあ、もう一杯貰って良いですか亜巳さん」

そう言ってコーヒーのお代わりを持ってきたのは喫茶「つむぎや」のオーナー「紬屋亜巳」であり、カブキの正体を知る数少ない人物である。

「ねえ、今回の魔化魍ってツチグモの仕業なのかな？」
「十中八九間違いないかもね」

魔化魍「ツチグモ」の仕業だとあっさり肯定するカブキ。その答えに疑問を持つ紬屋にカブキは新聞の記事を見せる。

「此処の部分よく見てください。此処に何か大きな物を引きずった跡がある。この規模を考えると山小屋と同じ面積になる」

「それで何でツチグモの仕業って解るの？」

「実はこの例は過去に幾つか有って、山小屋を使った擬態をするんです。実際にヒビキさんも山小屋に潜んでいたツチグモに遭遇したそうです」

カブキの説明を聞く紬屋。カブキは更に推理を進める。

「それに今回の被害者は二人の女性。ツチグモは女性と子供の肉を好んで捕食する習性が有るって訳です」

そう言って納得する紬屋と推理しコーヒーを飲むカブキ。すると其処へ、

コンコンコン

窓を叩く音がし、窓の外を見ると赤い小さな鳥が居た。これこそがカブキの言っていたタカちゃんこと「ディスクアニマル・茜鷹」で

ある。窓を開けると茜鷹は形を変え、一枚のディスクに変わる。

「来た来た来た、待ってたよタカちゃん」

そう言つてカブキは変身音又・音角の先の部分の折り曲げ茜鷹のディスクを取り付け回転させる。すると、ディスクから音が再生され、虎のような鳴き声が再生される。

「よっしゃ、当たりだ」

そう言つてカブキはコーヒを一気に飲み、自分の鞆を持つカブキ。

「んじゃ、行ってきます」

「気を付けて行ってらっしゃい」

魔化魍退治に出向くカブキに紬屋は火打ち石を二回叩き鳴らす。

こうして、カブキのツチグモ退治が始まろうとしていた。

Side End カブキ

Side 近衛近右衛門

カブキがツチグモ退治に出向く数分前……。

此処、麻帆良学園学園長室には数人の魔法使い達がいた。

「報告は以上です学園長」

「うむ、ご苦労じゃった」

如何にもダンディさを醸し出している男性『高畑・T・タカミチ』
とこの麻帆良学園の学園長でもあり、『関東魔法協会』の長を務め
ている見た目は妖怪の総大将ぬらりひょんであるが一応人間である
『近衛近右衛門』は高畑から受けた報告書を読んでいた。

「一応ではなく立派な人間じゃ!!」

「ど、どうしたんですか!? いきなり叫んで?」

「あ、いや、何か妖怪扱いされた気がしてのう……」

何か電波を受信したが、気のせいだと信じて再び報告書を見る。

「明らかに魔化魍の仕業じゃのう。さて、どうしたものか……」

「何を呑気な事を言っているのですか学園長。即刻退治しに行くべきです」

そうやってきたのは、褐色にメガネを掛けた男性『ガンドルフイ
ーニ』とその後ろには彼と共に行動している『高音・D・グットマ
ン』とその他の魔法使いである。

「しかしのう、そんな簡単には行かぬものじゃし……」

「学園長は我々『正義の魔法使い』が負けるとでも言うのでしょうか?」

学園長の優柔不断な態度に高音は問いかける。

この学園に所属する多くの魔法使いは正義が絶対と決めつけ悪を徹底的に排除するという何とも危なっかしい宗教団体のような物である。そしてこの学園に所属する魔法使いは魔化魍ですら倒せると思っているらしい。

「じゃが、もしもの事が有れば……」

「それでは遅すぎます！ 我々でその魔化魎とやらを討伐していきます。それでは失礼致します」

「あ、これ、ガンドルフィーニ君！」

近右衛門の呼びかけにも答えずガンドルフィーニとその魔法使いは部屋から退室していった。

「ふう、拙い事になってしまったぞい」

「先ほど瀬流彦先生から聞いたのですが彼も既に動いているようです」

「尚更拙いぞい、それ」

高畑の言う“彼”とは間違いなくカブキである。

「はあ、こうなったら仕方有るまい。タカミチ君、済まないが……」

「ハイ。今すぐ現場に向かい衝突を避けさせます」

「うむ、頼んだぞい」

そう言って高畑も学園長室から退室する。今、学園長室に残っているのは、近右衛門一人だけである。

「厄介な事でも起きなければ良いのじゃがのう……」

近右衛門はそう静かに呟くのだった。

Side End 近衛近右衛門

Side カブキ

また、場所が変わり、とある山奥。

ツチグモが現れた場所に向かっているカブキ。その道中、妙な気配を感じ取った。

（こりゃあ、連中も来てるみたいだな。見つかる前にとっと片づけますか）

そう言って歩き出そうとした時、奇妙な歌声が聞こえてきた。

おくにさんこちらへ、てのなるほへへ

おくにさんこちらへ、てのなるほへへ

声のした方を見ると其処には古めかしい格好の男女が二人。

そう、この二人こそがツチグモの教育係でもある『童子』と『姫』である。

「完璧にツチグモの童子と姫だな……。先にお前達を倒しますか」

童子と姫を確認したカブキは音角を鳴らし、額に翳すと鬼の紋様か浮かぶ。

「歌舞鬼、変身！」

その瞬間、カブキの姿が風と花びらに包まれていき、風と花びらが止むとその姿は赤と緑の色をした二つの左右非対称の角を持つ戦鬼、『歌舞鬼』とその姿を変えた。

「んじゃま、前置きは無しで派手に行くぜ！ 鬼棒術・烈翠剣アーンド、鳴刀・音叉剣！！」

歌舞鬼は左手に鳴刀・音叉剣を構え、右手には呪術で強化された音撃棒、烈翠剣を構える。歌舞鬼が構えると同時に童子と姫の姿も変わり、戦闘形態『怪童子』と『妖姫』へと姿を変え、歌舞鬼に襲いかかる。

「ヘッ、遅せえんだよ！」

歌舞鬼は襲いかかってくる怪童子と妖姫の攻撃を難なく防いだり、受け流したりしている。それでも怪童子と妖姫の攻撃の勢いは止まらない。

（此奴等、今までの童子と姫とは何か違う？ もしかして改造された奴か？ こうなったら……）

何かを思いついたのか、歌舞鬼は怪童子と妖姫の周りを素早く動き回る。その歌舞鬼を追いかけるように怪童子と妖姫も動き出す。

その時だった。

『グオッ！？』

『カ、身体ガ動カヌ！？』

追ってきた怪童子と妖姫が突然動けなくなる。怪童子達は辺りを見渡すと、其処には細い糸が所狭しと張り巡らされていた。

「逃げ回ったのはあくまでフェイク。本命はお前達の動きを封じる

事だ。此奴等を使つてな」

歌舞鬼の言葉に反応するかのように辺りにはディスクアニマルの大軍が動き回っている。歌舞鬼はディスクアニマルの大軍に迷彩を施し、糸を張り巡らせたのである。怪童子達は必死で糸を切ろうとするが中々切れず、逆に爪などが傷ついていく。

「これで終わりだ、鬼棒術・烈翠弾！」

歌舞鬼の烈翠の鬼石から緑の炎が燃え上がると、烈翠を怪童子達に向け振り下ろすと、火の玉になり怪童子達に直撃する。

『『グギャアアア！』』

怪童子達は断末魔を上げそのまま爆散し、後に残ったのは落ち葉だけである。

「よし、童子達は倒した。残りはツチグモだけだ」

歌舞鬼はそのままツチグモを退治しに行こうとした時、ここから少し離れた場所で爆発音が聞こえてきた。

「ここから近いな。んじゃま、パーティと洒落込みますか」

そう言って歌舞鬼は爆発の聞こえた方へと走っていくのだった。

Side End カブキ

Side 桜崎刹那＋自称・正義の魔法使い

ガンドルフイーニを筆頭に数人の魔法使いが魔化魍退治に向かうとする中、野太刀を持ったサイドテールの少女、『桜崎刹那』の表情は暗いままであった。

理由は簡単、今回の魔化魍退治である。

魔化魍は従来の妖怪や式神とは違い、普通の魔法や陰陽道、更に悪く言えば、自身が扱う『神鳴流』ですら太刀打ちできないのである。

では何故、彼女は此处にいるのか？ 理由は簡単、「神鳴流だから」である。

彼らは神鳴流である刹那を連れて行けば勝てると思っているのだが、現実が違う。神鳴流で倒せるのはあくまで童子と姫までであり、魔化魍には全くと言って刃が立たないのだ。魔化魍と妖怪は全く別の存在にも関わらず、彼らは倒せると考えているのである。

それに彼らは魔化魍を“只の強化された妖怪や式神の類”と思っているのである。

だからこそ彼らは知らなかったのだ。

魔化魍の恐ろしさを……

魔法使い達は目的地に向かう途中、異変に気付いた。いや、遅すぎたのかも知れない。

其処はもう既にツチグモのテリトリーに入っていたのだから。

ガアアアアアアアッ！

突然の雄叫びに驚く魔法使い達。その直後、異変が起きた。

「うわッ！」

「キャッ！」

魔法使いの二人が突然、茂みの向こうへと引きずり込まれて行き、バキバキと嫌な音が鳴り響く。ガンドルフィーニは慌てて救助に向かったが、既に遅く其処にいたのは、引きずり込まれた二人の魔法使いの杖とボロボロとなった衣服。

そして、虎柄の模様が浮かんでいる巨大な蜘蛛が彼ら魔法使いを睨み付けている。

「くッ、怯むなあ！ 仲間の仇を取るぞお！」

ガンドルフィーニを筆頭に残りの魔法使い達も魔法で攻撃を開始する。

「テスト・テロッタ・テリオット 魔法の射手！！ 連弾・光の1矢！」

「ライン・ルサイン・ランジェント 魔法の射手！！ 炎の32矢！」

「『影よ』。行きなさい！！！」

それぞれの得意な魔法を放つ魔法使い達。それぞれが放った魔法がツチグモを直撃する。

「刹那君！ 今だ！」

ガンドルフイーニの言葉に刹那は一瞬戸惑った。果たして自身の神鳴流で倒せるのか？　だが、今は出来ることをしようと思い、神鳴流の技をツチグモに向けて放つ。

「神鳴流奥義……斬魔剣!!」

放った斬撃がツチグモに直撃する。奥義による攻撃で辺りは煙で覆われている。

刹那の攻撃が決まり誰もが自分たちの勝利を確信しているが、刹那だけは違い、警戒を高めている。

自分の攻撃でツチグモを倒せるなんて思っていない。寧ろ、逆に怒らせたのかも知れないと考えている。

刹那の勘が当たり、煙が晴れると、其処にいたのは無傷のツチグモがいた。刹那の予想通り、物凄く怒っているようだった。

無傷のツチグモを見た魔法使い達は顔を青ざめ、退却を促すが、それを阻むかのようにツチグモの糸が彼らの身体に巻き付いていく。勿論、その場にいた刹那も同様だ。

しかもツチグモは、最初に刹那を食べ始めようとして刹那に近づく。これにより刹那は自身の死を想像してしまい、恐怖心に支配されてしまう。

（このちゃん……………ごめんなあ……………。うち、約束……………守れそうもないかも……………）

心の中で大切な友人に謝る刹那は自身の死を覚悟し、目を瞑った。

.....

しかし、いつまで経っても何の変化もない事に疑問を持った刹那は目を開けると其処にいたのは赤と緑の色をした鬼、歌舞鬼がツチグモの前に立っていた。

まるで、刹那を護っているかのように。

S i d e E n d 桜崎刹那＋自称・正義の魔法使い

S i d e 歌舞鬼

歌舞鬼が到着した頃には、魔法使い達が被害を受けていたが、歌舞鬼はそれを無視して少女・刹那の前に立った。

「よう、ツチグモちゃん。ちよいとお痛が過ぎんじゃねえのか？」

歌舞鬼の挑発的な言葉にツチグモは襲いかかろうとしたが、それが叶わなかった。

何故なら……。

「先に言っておくが、お前さんの足は全部斬らせて貰ったぜ」

そう言った途端、ツチグモは大きな鳴き声を上げた。無理もない。いきなり現れて自分の足を切られたのだから、相当痛いはずである。

しかし、そんなツチグモに容赦の欠片もない歌舞鬼はツチグモの背中に乗り、音撃鼓・花吹雪をツチグモの背中に取り付けると花吹雪は大きくなっていく。

それを確認した歌舞鬼は音撃棒・烈翠を取り出して構える。

「行くぜ！！ 音撃打・業火絢爛！！」

そう言って歌舞鬼は烈翠を花吹雪に向けて思いっきり叩いていく。

何度も何度も叩いていき、ツチグモを弱らせていく。

魔化魍の唯一の弱点。それは、戦鬼達による「清めの音」による攻撃「音撃」である。

「はああああああああ、はあ！！」

歌舞鬼が二つの烈翠で思いっきり叩くとツチグモは断末魔のような声を上げると、爆散して消滅した。

「ふうー、これにて、一件落着くと。大丈夫だったかい？ お嬢さん」

そう言って歌舞鬼は刹那に手を差し伸べる。

これが歌舞く鬼と魔法使い達の初めての邂逅となるのであった。

壺之巻 歌舞く鬼（後書き）

なんか、色々と変になっているのは気のせいであろうか？

それでも後悔しないと思う。

募集はまだまだ受け付けておりますのでお待ちしております。

式之卷 邂逅（前書き）

やっこの思いで更新できました。

ちょっと、無理やり感があるのはスルーしてください。

あと、募集の件でお知らせがあります。

式之巻 邂逅

歌舞鬼 Side

「ふう、これにて、一件落着つと。大丈夫だったかい？ お嬢さん」

刹那の前に現れたのは戦鬼・歌舞鬼は、刹那に手を差し伸べる。

「あ、貴方は……一体……？」

「ん？ 俺か？ よくぞ聞いてくれました！」

そう言つて歌舞鬼は、何処からか番傘を取り出し、番傘を開いた途端、いきなり構え出した。

「天が呼び、地が呼び、鬼が呼ぶ！ 戦鬼一の伊達男、歌舞鬼ったあ、あ、俺様の事でえい！！！」

まるで、歌舞伎役者のような構えを取る歌舞鬼。その姿に刹那は心を奪われていた。

そんな矢先だった。

「魔法の射手！！」

突如、放たれた魔法の矢は歌舞鬼の背中に直撃する。

「ぐあ！！」

魔法の矢が直撃した歌舞鬼はその場に倒れ掛けたが、何とか体勢を立て直した。

後ろを振り向くと其処には、ガンドルフィーニを筆頭にした自称・正義の魔法使いの集団がいた。

「ぐう……、な、何しやがんだ！ テメエー等！！」

「そうです！ 何故、その様な仕打ちをするんですか！？」

歌舞鬼が怒り、刹那は講義をするものの、ガンドルフィーニを筆頭に自称・正義の魔法使い達は二人の抗議を無視する。

「刹那君、その男は我々の敵なのだぞ！ 我々は正義の名の下に悪の象徴である鬼を排除する！！」

ガンドルフィーニの言葉に自称・正義の魔法使い達はそれぞれの武器や魔法を構える。その目には、命の恩人である歌舞鬼を化け物を見るような目であった。

「はあ、やっぱ助けんじゃなかったな……。こんなクズ共……」

「え？」

とても戦鬼とは思えない言動に驚く刹那。そんな歌舞鬼の言葉が聞こえたのか、ガンドルフィーニは怒りを露わにする。

「助けるだと？ 貴様があの化け物を睨けたのだろう！ その所為で仲間が二人、犠牲になってしまったんだぞ！ どうしてくれるんだ！」

その言葉を切っ掛けに周りにいた魔法使い達も騒ぎだし、歌舞鬼

に罵声を浴びせた。その火種はやがて、歌舞鬼を庇っていた刹那にも浴びせられた。

言いたい放題言われる歌舞鬼だが、とある見習い魔法使いの言葉によって最悪の事態になる事を彼らは知らない。

——お前のような化け物、存在しているだけで罪だ。

「ほう……。そんなに自分の命が要らないようだな……」

歌舞鬼の言葉に周りの空気が凍り付くかのようにだった。

歌舞鬼の言葉は静かであるものの、その裏には、彼らに対する怒りが籠められていた。

これには刹那も驚き、そして震えた。

かつて、戦鬼の一人である『竜巻鬼』という鬼と共に短い間であったが、修行をした事があった。その時の彼の姿は、厳しい所や怒りっぽい所があったが、決して人を憎むような怒りを出さなかったのだ。

それは他の戦鬼にも言える事で怒りに身を任したり、憎しみを抱くと、心が乱れ、音撃に集中できないのであると刹那は聞いてきた。

しかし、今この場にいる歌舞鬼は明らかに敵意と殺意と憎悪が籠められており、今にも彼らを殺しかねない状態であった。

「そんなに鬼を殺したいのか？ そんなに俺を殺したいのか？ そんなに俺が邪魔なのか？ ハッ！ 笑わすんじゃねえ！！」

辺りに歌舞鬼の怒声が響く。

「お前達の攻撃が魔化魍に通じたか？ 自分たちが勝てるって何でそう思った？ お前達は何した？ 何もしてないだろう？ それ以前に俺から見ればお前達の方こそが“悪”なんだよ！！」

「き、貴様！ 何を根拠に我々が悪だと……」

「根拠だと？ 簡単じゃねえか。お前達は自分たちの仲間を“犠牲”にしたんだろ？ しかもまだ中学生の子供をさあ。可哀想だよなあ、自分たちは魔化魍をおびき寄せるための“エサ”にされたんだからさあ」

「き、貴様アアアアアア！！！」

歌舞鬼の言葉に激怒するガンドルフィーニ。スーツの袖から小型拳銃とナイフを取り出そうとするが、歌舞鬼はそれを許さず、ベルトに掛けていた鞭でガンドルフィーニとその他を縛り上げた。

「弱いんだよ、クソ魔法使い共。これでぶっ潰……」

「其処までだよ、カブキ君」

歌舞鬼が烈翠で殴り掛かろうとした時、後ろから声が聞こえた。歌舞鬼は振り向くと、其処にいたのは眼鏡を掛けたダンディな男『タカミチ・T・高畑』その人である。

「何だ？ 死の眼鏡じゃねえか？ 邪魔しに来たのか？」

「邪魔しに来た訳じゃないんだが……、一歩遅かったようだね」

ガンドルフィーニ達は学園最強であるタカミチが来てくれたことに安堵し、彼に助けを求める。

「高畑先生！ 我々を助けに……」

「残念ですが、僕はあなた達を助けにではなく、彼、カブキ君を助けに来たのですから」

タカミチの言葉にガンドルフィーニは猛抗議する。

「な、何故ですか！？ その男は……」

「知っていますよ。彼が鬼だって事を」

タカミチの言葉に絶句するガンドルフィーニ達。タカミチはそんな事お構いもなく、彼らにある事を告げる。

「僕が此処に来たのは、学園長の命令でカブキ君を保護しに来たんだ。あなた達を助けに来た訳じゃない」

タカミチの容赦ない言葉に絶句する魔法使い。そんな彼らにタカミチはトドメの一撃を放つ。

「それと学園長の命令で今回の討伐に参加した者全員は魔法使いとしての活動を1ヶ月間の謹慎処分となります。万が一謹慎処分に魔法使いとしての活動をしたならば、本国への強制送還もやむを得ないと学園長は言っていましたよ」

その言葉を聞いたガンドルフィーニ達の顔が青くなっていく。それもその筈だ。学園長の決定は兎も角、破れば本国へ即強制送還されるという脅しを受けたのだから。

「さてと。カブキ君と刹那君は大丈夫だったかい？」

「ええ……、私は大丈夫ですが……」

「俺は此奴等に攻撃を受けて背中が痛いです」

「ああ、勿論医療費は学園長が負担する事になっているから」
「へえ、あのぬらりひょんがねえ」

回りの事を気にせず歌舞鬼達はその場を後にしていった。

其処に残っていたのは、呆然としている哀れな魔法使い達だけであつた。

歌舞鬼 Side End

近右衛門 Side

近右衛門は戸惑いを隠せなかった。

その理由はガンドルフィーニが起こした不祥事についてだ。何せ、魔法生徒二人が魔化魍の犠牲になってしまったのである。無論それだけではなく、彼らについての謹慎処分についても頭を抱えていた。

「ハァ、面倒な事になったもんじゃわい……」

「ご愁傷様です学園長」

そう言つて近右衛門に労いの声を掛けるのは麻帆良学園の教員でもあり魔法先生の一人、『瀨流彦』である。

「しかし、ガンドルフィーニ君達も困ったもんじゃな……」

「ですけど今回の件は優柔不断な学園長の責任じゃないんですか？」

「ぐっ、そう言われると返す言葉もないのう……」

瀨流彦の言葉に言い返せない近右衛門。そう、今回の一件はガンドルフィーニ達による独断行動のみならず、学園長でもある近右衛

門にも非がある。この事が連合に知られれば、間違いなく厳しい処罰が降るであろう。

そう、“知られれば”の話であるが……。

「瀬流彦君や、この一件は何としても上に知られないようにしてくれんかね？」

「そう言われると思って既に手は打ってあります」

「ほう、そうかそうか。いやあすまんのう」

瀬流彦の手早い対応に労いを掛ける近右衛門。どうやら二人はこの件を極秘にしようと考えているらしい。

端から見れば、最低の行為なのだが、これには理由がある。

「何としてもカブキ君達“鬼”を守り通せねばならん」

「はい。僕もそれは重々承知しています」

彼らが隠し通す理由。それはカブキ達“戦鬼”を連合から守るためである。

例え、連合を敵に回しても彼らは“戦鬼”を守るのであった。

式之卷 邂逅（後書き）

はい、今回はカブキと刹那と鬼を悪と見る魔法使いとそれを守る学園長と瀬流彦君でした。

なぜ二人が鬼を守るかは、追々説明します。

前書きでも書きましたが、募集に関してのお知らせです。

なかなか募集が集まりませんので、募集の受付を終了します。

ですけど、何かアイディアや提案などがあればジャンジャン言ってください。

何とか要望などに答えようと思います。

これからどうか宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787w/>

麻帆良に歌舞く鬼

2011年11月15日16時02分発行